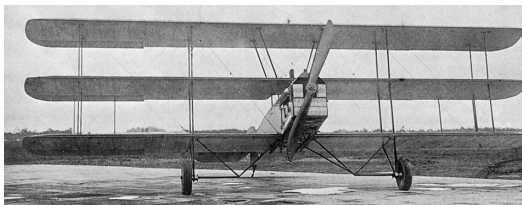
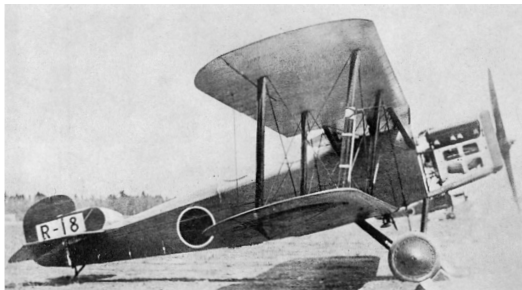
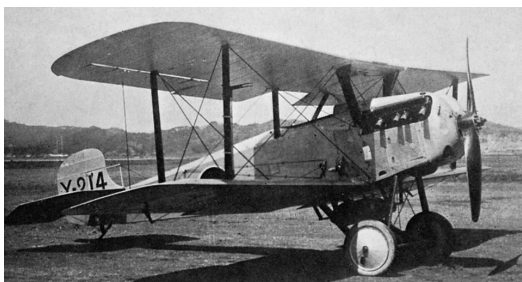


# 78 日本艦上機の開祖 十年式トリオ

日本海軍は世界に先駆けて、最初から空母として設計・建造した鳳翔を大正11年（1922年）に竣工させた。しかし鳳翔の建造が開始された大正8年（1919年）当時、この空母に搭載するべき艦上機は、まだ日本で開発・設計することはできなかった。日本で最初に軍艦から飛行機が発進したのは、大正9年（1920年）、水上機母艦若宮の特設甲板から、イギリス人のブランクレー少佐がグロスター・スパローホーク艦上戦闘機で離艦した時であった。

その翌年の大正10年（1921年）2月、日本海軍は三菱に国産艦上機の製造を発注、三菱はイギリスより技術者を招いて、設計にとりかかることとした。その技術者とは、ソップイス社（後にホーカー社となる）でパップや3葉のトリブレン、キャメル戦闘機を設計したハーバート・スミスほか8人であった。



上から一〇式戦闘機、一〇式偵察機、一〇式雷撃機。

海軍は艦上機として、戦闘機と偵察機、そして雷撃機の3機種を求め、三菱ではまず戦闘機から開発を開始した。スミスは複葉の堅実な機体とし、それまでのスミスの戦闘機が空冷星型のエンジンを装備していたのとは違い、三菱ヒ式、つまりイスパノスイザ水冷V型8気筒エンジンをライセンス生産したものを装備した。こうして作られた機体が、三菱1MF、一〇式艦上戦闘機で、大正10年の10月に英海軍のジョーダン大尉の操縦で初飛行した。鳳翔の竣工に先立つこと約3カ月のことで、つまり日本海軍は、空母の建造と艦上機の開発を並行して進めていたわけである。

鳳翔は大正10年12月に竣工、一〇式艦上戦闘機は2年後の大正12年2月に、ジョーダン大尉により鳳翔からの離着艦に成功した。さらに3月には日本人パイロットの吉良大尉も一〇式艦上戦闘機で鳳翔での離着艦を行なっている。

この一〇式戦闘機に続いて、同じくスミスの設計による一〇式艦上偵察機（2MR）が大正11年1月に初飛行した。一〇式艦上偵察機は、一〇式艦上戦闘機を拡大、複座とした機体で、大正12年に制式採用となったが、名称は一〇式であった。

さらにスミスは艦上雷撃機も設計した。これが一〇式艦上雷撃機（1MT）で、重い魚雷を搭載して離着艦できるよう、大きな翼面積を確保しつつ、空母運用のために翼幅を制限しなければならず、スミスは3葉とした。乗員はイギリスのソップイス・クッカー艦上雷撃機と同様、パイロット1名であった。またエンジンはヒ式ではなく、出力の大きいネイピア・ライオン水冷W型12気筒を装備した（2号機はロレーヌ製エンジンを装備）。

一〇式艦上雷撃機は大正11年8月に、やはりジョーダン大尉の手で初飛行した。しかし実際の空母での運用には、3葉で背が高いために、特に格納庫内での扱いに問題が多く、決して成功とはいえない機体であった。

これら一〇式の3機種で、イギリスの技術を借りたとはいえ、日本は艦上機の国産開発に第一歩を踏み出すこととなった。一〇式艦上戦闘機は昭和3年（1928年）までに各型128機、一〇式艦上偵察機は昭和5年（1930年）までに各型159機が生産された。一〇式艦上雷撃機が生産数は20機で終わっている。

## Q 78 十年式トリオの総生産機数は？

1 287 機

2 297 機

3 307 機

4 317 機